

知的優秀児の性格特徴に関する一研究

森 重 敏

I 問 題

従来、知的優秀児の特質については、Terman, L. M. ら⁽¹⁾の生産的な継続研究をはじめ、Baldwin, B. T.⁽²⁾ Hollingworth, L. S.,⁽³⁾ Witty, P. A.,⁽⁴⁾ Hildreth, G. H.⁽⁵⁾ などによる組織的研究によって各局面から検討されており、それらによって、知的優秀児が、知能の面のみならず、性格面や身体的発達においても一般の普通児より優れていることが指摘される。そしてまた、児童の将来への展望もある程度可能である。

しかし、これは主にアメリカの児童についての期待であって、わが国の優秀児についての研究は、なお欧米のそれに比して低段階にあるといえる。特に、優秀児の本質に直接ふれる主要面と思われる性格特徴の問題は、解明を必要とするもっとも重要な課題の一つとして考えられる。

この意味で、従来わたくしが試みて来た優秀児の諸調査のうち、性格特徴に関する部分をとりあげ、優秀児一般の特質を明かにする一手がかりを探ってみたい。

II 方法および手続

知的優秀児の特徴をできるだけ多角的に調べ、その特異性を探って検討するために、優秀児の遺伝関係、家庭的背景、生育歴、身体的特徴および健康状態、性格、および適応について各種のテスト、質問紙、面接、および事例研究による研究を行った。それに先だち、次のような手続で知的優秀児を検出し、あわせて、これと比較するための普通児を選出した。

1 優秀児の検出

優秀児研究の基礎的手続として、まず一つの実験校を選び、その全児童について決定的な知能検査を実施することにした。そこで、被験校として、地理的環境、社会的階層、学校の水準、および協力体制といった観点から、東京都港区立三光小学校を選定し、1～6年の各学年にわたって知的優秀児を発見するという手続きをとった。

検出にあたっては、まず、すでに学校で実施済みの集団知能検査（田中B式第1形式）の結果に基づいて知能偏差値（SS）65以上の児童を見出し、全校で男子30名女子15名の優秀児候補を得た。（第1次検出）

次に、こうして選ばれた児童全員に対して、WISC 知能診断検査を個別的に実施し、IQ 130以上のもの、男子19名女子6名計25名を検出した。（第2次検出）これらを、本研究の対象とすべき知的優秀児（G群）とした。

さらに、この実験群としてのGと比較するために、さきの集団知能検査のSS 45—54を有する

全児童について、学年ごとに優秀児と同数の児童を無作為に抽出し、代表的な普通児（N群）25名を得た。

知能テスト実施期は昭和34年1月24日—3月18日、テスターは東京家政大学児童学研究室助手2名および筆者の3名。

このようにして得られたG群のIQ頻度は、Table 1 および Table 2 に示すとおりである。

Table 1 優秀児の IQ 分布と出現率					
I. Q.	知能段階	人 男	数 女	計	※ 出現率 (%)
150以上	最優	1	0	1	0.095
145～149		3	1	4	0.381
140～144		1	0	1	0.381
135～139		5	2	7	0.666
130～134		6	3	9	0.856
計		17	6	25	
120～129	優	6	8	14	
110～119	中上	4	1	5	
90～109	中	0	1	1	
※ 計		10	10	20	

※ 出現率は全校児童1051名に対する百分比を示す。

Table 2 優秀児の学年別出現度						
学年	検 出 数			出 現 率(%) ※		
	男	女	計	男	女	計
1	3	0	3	3.3	0	2.1
2	3	2	5	3.6	2.6	3.1
3	0	1	1	0	1.0	0.5
4	2	2	4	2.2	2.1	2.2
5	4	1	5	3.2	1.1	2.3
6	7	0	7	9.2	0	4.5
計	19	6	25	3.4	1.2	2.4

※ 出現率は各学年の児童に対する百分比

2 性格検査の実施

次に、こうして得られたG、N両群に対して、投影法および質問紙法による各種の性格検査を試みた。すなわち、同年3月～4月に筆者試案の優秀児性格特徴検査、淡路円治郎案性行評定尺度、三好稔編基本的欲求検査（改訂版）および石川七五三二編著性格興味型検査を行い、35年2月～3月に、ロールシャッハ・テストを行った。テスターおよび調査者は、東京都立大学心理学専攻学生2名、同大学院博士課程学生1名（ロールシャッハのみ）、三光小教諭外村近および筆者。

Ⅲ 結果および考察

1 WISC の結果

上述の方法で検出された優秀児の出現度を見るために、知能段階にまとめたのが Table 1 であり、学年別にまとめたのが Table 2 である。両表に示されているように、全G群の出現率は2.4%となり、WISC における最優の理論値（2.2）にきわめて近似している。

性別出現率は男子の方が大きく、学年別では6年生の出現度が最大で、3年生のそれが最小である。

また、G群の平均IQは言語性 137.24、動作性 128.16、全検査 138.16 で、その出現率は全校1,051人中 2.37%である。田中B式テストによるSSではG69.28、N50.08で、Gが相対的にIQの高いことがわかる。

2 教師と両親による性格特徴の評価

まず、ヒルドレスの実験的な研究の結果、優秀児の性格特徴としてあげているものを筆者が整理して、好ましい特徴と好ましくない特徴それぞれ35項目からなる特徴検査を作成し、これをG、N両群について、担任教師とそれぞれの父母に評定してもらった。その結果は Table 3、Table 4 の

通りである。

Table 3 質問紙による性格特徴
(教師の評定)

児童 特徴	G	N
好 ま し い	350(16.7)	145(6.9)
好ましくない	69 (3.3)	140(6.7)
備 考	$\chi^2=7.05 > p > .02$ G, N とも各21人	

Table 4 質問紙による性格特徴
(父母の評定)

児童 特徴	G	N
好 ま し い	281(14.1)	195(9.75)
好ましくない	79(3.95)	142 (7.1)
備 考	$\chi^2=3.304 .10 > p > .05$ G, N とも各20人	

注：数字は特徴項目件数 () 内はその1人当たり件数

すなわち、教師の評定によると、G群の「好ましい」特徴はN群の2.4倍もあるのに対して、「好ましくない」特徴は逆にNの方がGの2倍になっている。両親の評定の場合もほぼ同様な傾向を示している。また70項目のうち、好ましい特徴でGの方が少ない場合は皆無であり、好ましくない特徴でGの方が多い場合は4件しかなかった。両群の間で差異の著しい特徴項目を挙げると、Table 5, および Table 6 のようである。

Table 5 好ましい性格特徴と好ましくない特徴 (教師の評定)

好 ま し い				好 ま し く な い			
項 目	G	N	検定	項 目	G	N	検定
判断・推理に富む	85.7	4.8	***	人 気 が な い	0	33.3	***
知 り た が る	76.2	33.2	△△	判断・推理乏しい	0	23.8	***
理 解 が 早 い	76.2	14.2	***	記 憶 が に ぶ い	0	19.0	**
常 識 発 達	76.2	9.5	***	理 解 お そ い	0	14.3	***
研 究 欲 旺 盛	66.7	19.0	*	常 識 乏 し い	4.8	42.9	***
記 憶 力 に 富 む	66.7	14.2	**	自 信 が な い	4.8	19.0	*
言 葉 豊 富 明 瞭	61.9	23.8	△	言 葉 貧 弱 不 明 瞭	4.8	19.0	△
経 験 興 味 を 話 す	61.9	23.8	△	統 率 力 乏 し い	9.5	28.6	**
人 気 ・ 尊 敬 さ れ る	57.1	4.8	***	注 意 散 漫	9.5	23.8	△△
自 信 を も つ	52.4	4.8	*	知 り た が ら な い	14.3	38.1	△△
統 率 力 が あ る	52.4	4.8	**	不 熱 心	14.3	33.3	*
進 取 的 に 行 動	38.1	14.2	△	非 進 取 的	14.3	28.6	△
※ う ぬ ぼ れ な い	30.0	60.0	***	う ぬ ぼ れ る	9.5	0	*

注：①項目欄の※は親への調査結果。 ②検定に χ^2 検定による有意水準，***1%，**2%，*5%，△△10%，△20%を示す。 ③表中の数は%を示す。 ④Gは優秀児群，Nは普通児群を示す。以下これに準ず。

すなわち、教師と父母との評定において若干のズレが見られるが、明朗・知りたがる・記憶力に富む・理解が早い・言葉豊富明瞭・判断力推理力などの点でG群がN群より優れていることを、両者の評定は示している。さらに、教師の評定では人気・尊敬・自信・統率力で、また親の評定では、注意集中・生活の張り、などの点でGが優れている。他方、好ましくない特徴面では両評定者の一致した傾向として、記憶にぶい・理解遅い・判断推理にぶい・不熱心・物事を知りたがらない・統率力乏しい・あまり他人をしをぎたがらないといった面でN群が劣っており、常識が乏しい・自信がない・注意散漫・経験興味を話さないは教師評定で、言葉貧弱・不明瞭・無芸不器用・独創力乏

しいは親評定で、それぞれ N の方が劣位にある。しかし、親の評定で「無気力」、教師の評定で「うぬぼれる」の項目が N に少なく、G に多いことは注目される。

Table 6 好ましい性格特徴と好ましくない特徴（父母の評定）

好 ま し い				好 ま し く な い			
項 目	G	N	備考	項 目	G	N	備考
明 朗・快 活	70	35		言 葉 貧 弱 不 明 瞭	0	40	
注 意 集 中	65	30		無 芸・不 器 用	0	15	
知 り た が る	65	30	◎	独 創 力 乏 し い	0	15	
記 憶 力 に 富 む	65	30	◎	不 活 発	0	10	
理 解 が 早 い	55	15	◎	不 真 面 目	0	10	
言 葉 豊 富・明 瞭	50	15	◎	記 憶 に ぶ い	0	10	
判 断 推 理 に 富 む	50	10	◎	快 活 で な い	0	5	
生 活 に 張 り	45	5		非 同 情 的	0	5	
常 識 発 達	35	15		理 解 お そ い	5	20	◎
人 気・尊 敬 さ れ る	30	15		判 断 推 理 に ぶ い	5	20	◎
独 創 力 が あ る	20	10		生 活 の 張 り 乏 し い	5	15	
事 務 的・能 率 的	20	10		人 気 が な い	5	15	
融 通 が き く	20	10		不 熱 心	10	35	◎
多 芸・器 用	15	5		知 り た が ら な い	10	30	◎
他 人 を し の ぎ た が る	15	0		困 難 を 後 ま わ し	15	50	
※う ぬ ぼ れ な い	30	60		向 上 心 が 乏 し い	15	35	◎
※割 に 成 熟	5	10		統 率 力 が な い	15	30	◎
				他 人 を し の ぎ た が ら な い	25	55	◎
				※す な お で な い	10	5	
				※無 気 力	15	0	
				※う ぬ ぼ れ る	25	0	

注：項目欄の※は注目点、備考欄の◎は教師評定の場合も差の顕著なもの、数字は%を示す。

3 教師と両親による性行評定

次に、20項目からなる幼児性行評定尺度（5段階評定）で、同様にして教師と両親の評定を求めた。その結果は Table 7、Table 8 のように示される。

Tadle 7 性行評定尺度による特徴（教師の評定）

段階	-2	-1	0	+1	+2
児童					
G	0.38	1.81	3.48	6.57	7.76
N	1.52	2.80	6.61	5.19	3.67

注：G、N とも各21人

Table 8 性行評定尺度による特徴（父母の評定）

段階	-2	-1	0	+1	+2
児童					
G	0.8	2.45	4.25	5.4	7.1
N	2.0	2.55	5.25	5.05	5.15

注：G、N とも各20人

数字は各評定段階に対する性行項目の平均件数を示す。

すなわち、この場合も、教師と両親の評定には差異が見られるが、一般に G に＋評定が多く、N に一評定が多いことがわかる。この傾向を内容的に示したのが、Table 9 と Table 10 である。

Table 9 性行評定尺度の分布 (教師の評定)

項 目	段 階 児 童		段 階		段 階		段 階		項 目
	-2	-1	0	+1	+2				
	N G	N G	N G	N G	N G				
1. 気むずかしい	1 0	2 7	8 3	7 6	3 5	気 軽 で あ る			
2. 興奮しやすい	3 0	3 3	5 6	7 4	3 8	平 静 で あ る			
3. 何ごとにも興味薄い	0 0	7 1	6 1	5 7	3 12	物 事 を 知 り た が る			
4. 気が散りやすい	5 1	4 0	4 6	5 7	3 7	よ く 注 意 す る			
5. あきっぽい	3 1	6 4	5 2	3 5	4 9	根 気 が よ い			
6. 性急である	2 2	4 3	7 6	3 5	5 5	落 ち つ き が あ る			
7. 元気がない	0 0	5 2	4 0	4 8	8 11	元 気 で あ る			
8. 独創が少い	3 0	4 1	10 5	3 10	1 5	工 夫 を こ ら す			
9. 意思を発表しない	3 0	2 0	4 3	6 3	6 15	率 直 で あ る			
10. いいなり次第になる	0 0	2 1	9 1	7 5	3 14	自 分 の 考 え で 行 動 す る			
11. ※依頼心が強い	2 0	1 3	6 1	9 6	3 11	自 分 の こ と は 自 分 で す る			
12. 剛情をはる	1 2	4 1	5 2	5 6	6 10	す な お で あ る			
13. ひとりぼっちを好む	1 0	3 3	8 4	7 7	2 7	協 力 す る			
14. わがままを振舞う	2 1	1 0	8 5	7 7	3 8	秩 序 を 守 る			
15. ふざけたがる	3 1	2 2	7 6	3 7	6 5	悪 ふ ざ け を し な い			
16. ねたみ深い	0 0	2 1	10 2	4 10	7 8	そ ね ま な い			
17. よくすねる	1 0	2 1	8 4	2 9	6 7	我 慢 す る			
18. ※人とよくけんかする	1 0	2 1	4 3	9 10	5 7	睦 み 合 う			
19. 冷淡である	0 0	2 0	11 7	5 12	3 2	ひ と の 面 倒 を 見 る			
20. ものを粗末にする	1 0	4 4	10 6	4 4	2 7	も の を 大 切 に す る			
計	32 8	60 38	139 73	107 138	82 163				

注：淡路氏案第11項目「人の厄介になりたがる」、第18項目「人をいじめる」をそれぞれ11※18※のように修正して実施した。

すなわち、知りたがる・よく注意する・根気がよい・工夫をこらす・率直である・自分の考で行動する・秩序を守る・ものを大切にするの諸点で、+2段階のものがGにより多く、気が散りやすい・あきっぽい・独創が少い・意思を発表しないの諸点で、-2段階のものがNにより多いことが、教師・親両者の評定に共通的に見られる。しかし、平静・自分のことは自分で・すなおの項目で+2がGに多いと教師が評定しているのに対し、親の評定では逆にNの方により多いというようなズレも見られる。

4 優秀児の基本的欲求

次に、4, 5, 6年のG群とN群に基本的欲求検査を試みた。本検査の整理法によって、9個の欲求範疇の強さおよび家庭・学校・社会の各場面の欲求の強さを求め、その程度を所定の標準点表から学年別グループ別に弱い(-), 普通(0), 強い(+)の3段階にまとめると、Table 11のようになる。また、各学年を通じて両群における諸欲求の程度を人数(%)で示すと、Table 12のようになる。

すなわち、上表に見られるように、学年によつて多少傾向は異なるが、一般に、G群はN群に比べて、独立・罪を避ける欲求および学校場面の欲求がやや強く、社会的見解の欲求および家庭場面の欲求が比較的弱い。その他の欲求については、両者間に大差は見られない。また、概して、Gの

Table 10 性行評定尺度の分布（父母の評定）

段 階 児 童		- 2		- 1		0		+ 1		+ 2		段 階 児 童	
		N	G	N	G	N	G	N	G	N	G		
項 目		N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	項 目	
1.	気 む ず か し い	2	1	4	3	5	3	5	3	4	10	気 軽 で あ る	
2.	興 奮 し や す い	2	4	7	8	4	4	3	2	4	2	平 静 で あ る	
3.	何 ごと にも 興 味 薄 い	2	0	1	0	5	0	1	5	11	15	物 事 を 知 り た が る	
4.	気 が 散 り や し い	5	2	3	3	1	4	8	5	3	6	よ く 注 意 す る	
5.	あ き っ ぽ い	3	1	3	3	3	5	9	5	2	6	根 気 が よ い	
6.	性 急 で あ る	3	2	3	8	4	4	6	5	4	1	落 ち つ き が あ る	
7.	元 気 が な い	0	0	0	0	4	3	5	3	11	14	元 気 で あ る	
8.	独 創 が 少 い	3	1	0	1	8	7	6	3	3	8	工 夫 を こ ら す	
9.	意 志 を 発 表 し な い	4	0	4	4	5	1	3	5	4	10	率 直 で あ る	
10.	い い な り 次 第 に な る	1	0	0	1	6	2	8	5	5	12	自 分 の 考 え で 行 動 す る	
11.	依 頼 心 が 強 い	2	2	2	1	7	6	4	9	5	2	自 分 の こ と は 自 分 で す る	
12.	剛 情 を は る	5	1	5	5	2	7	3	4	5	3	す な お で あ る	
13.	ひ と り ぼ っ ち を 好 む	2	0	2	1	4	1	6	10	6	8	協 力 す る	
14.	わ が ま ま を 振 舞 う	0	0	3	2	7	4	8	8	2	6	秩 序 を 守 る	
15.	ふ ざ け た が る	1	0	6	6	7	6	3	5	3	3	悪 ふ ざ け を し な い	
16.	ね た み 深 い	0	0	1	1	7	4	4	6	8	9	そ ね ま な い	
17.	よ く す ね る	0	0	1	0	7	9	5	5	7	6	我 慢 す る	
18.	人 と よ く けん か す る	1	0	1	0	8	4	5	11	5	5	睦 み 合 う	
19.	冷 淡 で あ る	0	1	1	0	9	5	3	7	7	7	ひ と の 面 倒 を 見 る	
20.	も の を 粗 末 に す る	4	1	4	2	2	6	6	2	4	9	も の を 大 切 に す る	
計		40	16	51	49	105	85	101	108	103	142		

Table 11 基本的欲求の程度

学 年	種 類 児 童		愛 情	成 就	所属参加	独 立	経済的安定	社会的承認	恐怖侵害を さける	罪をさける	社会的見解	家 庭	学 校	社 会	
	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	N	G	N	G
6 年		—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○	○	○	+
5 年		○	○	○	○	○	+	○	○	○	+	○	○	○	○
4 年		○	○	○	○	○	—	○	○	+	+	○	—	—	+

注：G群は 17人、N群は 18人、以下同様

Table 12 基本的欲求の段階分布（%）

段 階	種 類 児 童		愛 情		成 就		所属参加		独 立		経済的安定		社会的承認		恐怖侵害を さける		罪をさける		社会的見解		家 庭		学 校		社 会	
	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G
—	33.3	17.6	5.6	11.8	38.9	11.8	38.9	17.6	0	17.6	11.1	17.6	16.6	29.4	61.1	35.3	11.1	35.3	11.1	35.3	38.9	5.9	16.7	5.9		
○	38.9	58.8	66.7	47.1	44.4	70.6	44.4	35.3	94.4	70.6	72.2	58.8	66.6	41.2	38.9	47.1	38.9	52.9	50.0	64.7	55.6	64.7	61.1	64.7		
+	27.8	23.5	27.8	41.2	16.7	17.6	16.7	47.1	5.6	11.8	16.7	23.5	16.7	29.4	0	17.6	50.0	11.8	38.9	0	5.6	29.4	22.2	29.4		

場合、欲求間の強弱の偏異度は比較的に著しいが、家庭・学校・社会の各場面の欲求は、より安定的である。

5 優秀児の興味型

次に、性格興味型検査を GN 両群に試みた。本検査の採点法によって、興味型得点から興味偏

差値を算出し、基準の段階区分に基いて学年別に両群の興味の程度を示すと、Table 13 のようになり、全学年における両群の興味型の段階分布は、Table 14 のように示される。

Table 13 性格興味型の程度

学 年	興味型 児 童	理 論		経 済		権 力		審 美		社 会		宗 教		活 動	
		N G		N G		N G		N G		N G		N G		N G	
		N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G
6 年		-1	0	+1	+1	0	0	0	0	-1	0	-3	-3	+1	+1
5 年		0	0	+1	0	0	-1	-1	0	-1	0	-3	-3	+1	+1
4 年		-1	0	-2	0	+1	0	+1	0	0	-1	-2	-3	0	+1

Table 14 性格興味型の段階分布 (%)

段 階	型 児 童	理 論		経 済		権 力		審 美		社 会		宗 教		活 動		計	
		N G		N G		N G		N G		N G		N G		N G		N G	
		N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G	N	G
+3		—	—	6.2	5.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.9	0.8
+2		—	5.9	25.0	23.5	6.2	5.9	6.2	11.7	6.2	5.9	—	—	43.8	35.3	12.5	12.6
+1		25.0	11.7	18.8	23.5	37.5	17.6	18.8	23.5	—	5.9	6.2	—	25.0	35.3	18.8	16.8
0		31.1	52.9	18.8	35.3	37.5	23.5	50.0	47.1	43.8	70.6	—	—	12.5	23.5	27.7	36.1
-1		25.0	23.5	18.8	5.9	18.8	41.2	18.8	17.6	31.3	5.9	12.5	11.7	12.5	—	19.6	15.1
-2		12.5	5.9	—	5.9	—	5.9	6.2	—	12.5	11.7	6.2	17.6	—	5.9	5.4	7.6
-3		6.2	—	12.5	—	—	5.9	—	—	6.2	—	75.0	70.6	6.2	—	15.2	10.9

すなわち、興味型では、Gは高度の理論・審美・社会の興味型を示すものが比較的多く、権力型のは少ない。その他の興味型は、G, N, はほぼ同様である。とくに宗教的興味で、両群とも極めて低段階にあることが注目されるが、これは戦前に標準化されたテスト内容の問題点を示すものと考えられる。

6 ロールシャッハ・テストによる特徴

さらに、優秀児の性格特徴を質的に把握するため、GN 両群にロールシャッハ検査を試みた。図版は原版を用い、実施・処理・考察は主に Klopfer によつた。その主な結果をまとめると、次のようである。

まず、平均反応時間においては、G群 21'41'', N群 22'54'', 初発時間は、G群 26.08'', N群 28.65'' で差は見られない。しかし、平均反応数においては、G群33.88, N群30.56で、Gの方がやや反応数が多い。

また、反応の領域 (Location), 決定因 (Determinant), 内容 (Content) の反応結果をまとめると、Table 15 のようになる。

Table 15 Location, Determinant & Content の主な反応 (平均)

角 度 児 童	Location						Determinant			Content	
	W	D	d	Dd	d+Dd	S	M+	M-	FM	H	Ad
G	13.76	10.72	4.00	4.04	8.04	0.48	1.64	0.52	2.00	4.20	2.16
N	14.76	12.20	1.16	0.96	2.14	0.24	1.0	0.44	1.36	1.88	1.00

すなわち、G群の $d+Dd$, M , H はやや多い傾向にある。さらに数個の角度から分析してみると、次の傾向がみられる。

- 1) 平均A% G群47.9%, N群53.1%で、G群がやや少ない。
- 2) $FC:CF+C$ $FC>CF+C$ がG群に多く、 $FC<CF+C$ がN群に多い。(2%の有意差)
- 3) $\Sigma C:M$ G群に $\Sigma C<M$ が、N群に $\Sigma C>M$ が比較的多い。

このような諸傾向は、G群が知的能力において優れているばかりでなく、豊かな想像や興味、分析的な把握に優れ、環境に敏感で情緒的表現が豊かで、情動の統制も強く、また創造的・内向的でもあることを示している。つまり、先に見た優秀児の性格特徴の優秀性は、こうしたパーソナリティの特質によつて支えられていることを知ることができる。

IV 要 約

以上において、普通の一小学校における知的優秀児の検出によってその存在率を確認し、そこで試みたいろいろな性格検査によって、優秀児の性格特徴を検討した。それぞれの検査面において、少なからず知的優秀児の性格的優秀性が認められ、傾向としても、多くの優秀性が暗示された。そうして見出された特性を、さらにプロジェクトテクニックによって検討することにより、確認することができた。今後の課題として、研究方法を吟味し、特に活動場面におけるダイナミックな特性面を追求し、知的優秀児の本質の解明へ接近しようとするものである。

付記：末尾ではあるが、本研究の遂行にあたって研究費の御援助を賜った馬目太平治氏に対して心からお礼の言葉を申し上げたい。また、終始あたたかい御助言と御鞭撻をいただいた山下俊郎先生、および調査実施に快く御協力くださった三光小学校校長遠藤五郎先生ならびに外村近教諭その他の先生方に対して深く感謝の意を表したい。なお、実施に多大の労を要した諸種の検査・調査は、本学児童学研究室の上原万里子、柴田礼子両助手の手を煩わした。あわせて深謝したい。

- 注 (1) Terman, L. M., et al.; Genitic studies of genius : Vol. I. 1925, Vol. II. 1926, Vol. III. 1930, Vol. IV. 1947.
- (2) Baldwin, B. T.; Methods of selecting superior or gifted children. Yearb. Nat. Soc. Stud. Educ., 23 (1), 1924, 25—47.
- (3) Hollingworth, L. S.; Gifted children : Their nature and nurture, 1926, New York : Macmillan.
- (4) Witty, P. A.; A study of one hundred gifted children. Univ. Kan. Bull. Educ., State T. C. Stud. Educ., 1, No. 13, 1930.
- (5) Hildreth, G.; Characteristics of young gifted children. J. Genet. Psychol., 53, 1938, 287—311

文 献

- 森 重敏：知的優秀児の特性に関する基礎研究（第1報告）—発達特徴について—教育心理学研究，第7巻第3号 1—11
- 森 重敏：知的優秀児の特性に関する基礎研究（第1—第8報告）（日本心理学会，日本応用心理学会，日本保育学会での発表論文抄録）
- 森 重敏：天才児，児童心理学ハンドブック，特殊児童，昭34.
- 森 重敏：優秀知能，現代心理学大系，第14巻，特殊教育，昭33，203—208.
- 森 重敏：優秀児，児童心理叢書，V，特殊児童の心理，昭23，47—94.